

「はなやままるごと自然博物館」報告書

1. 趣旨

青少年教育施設の一つの役割である学社連携・融合を具現化する観点から、花山青少年自然の家がもつ教育環境・教育資源を活用した体験的な学習活動を展開し、新学習指導要領が目指す児童の生きる力の育成を図る。

2. 事業の概要

- (1) 期 日 令和7年7月7日(月)～7月8日(火)【1泊2日】
- (2) 参加者 栗原市立花山小学校の全校児童6名(6年生3名、4年生1名、1年生2名)

3. 連携・協力

- (1) 花山協働教育推進委員会、国立花山青少年自然の家
- (2) 講師 栗駒山麓ジオパークビジターセンター 専門員 原田 拓也 氏

4. 企画運営のポイント

- (1) 教育効果を高めるために、栗駒山麓ジオパーク専門員原田拓也さんを講師として招聘し、事前学習及び沢活動を行った。また、教科等横断的な学びの視点を用いて体験活動を行った。
- (2) 児童の自立を促すために、児童と共に事業計画を立てたり、事前学習を行ったりして、見通しを持ちながら主体的に取り組めるようにした。
- (3) 交流を深めるために、学生がアイスブレイクやキャンプファイヤーの出し物を提供する場面を設定し、能動的に子ども達と関わることができるようにした。

5. 日程

7月7日(月)	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
	学校出発				出合いのつどい	フレイク	1年「生活科」 沢遊び②	昼食(弁当) 見晴らし広場	1年「生活科」 外どこ	ベッドメイク	自由遊び	つどい	夕食 (食堂)	キャンプファイヤー	入浴 休憩 準備	就寝	
学校職員 & 自然の家職員 & 学生										自然の家職員 & 学生							
7月8日(火)	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
	起床	洗面・清掃	つどい	朝食	準備	「生活科」&「家庭科」 野外炊事			ふり 返り	別 れの つどい	自然 の家 出 発	学校 着 ・ 下 校					
自然の家職員 & 学生				学校職員 & 自然の家職員 & 学生													

6. 主な活動内容

① 事前学習 (学習のポイント)



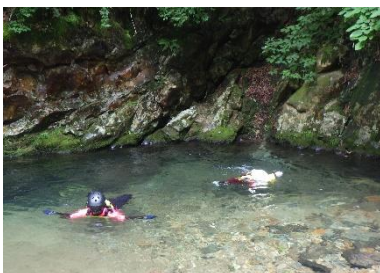
② 事前学習 (岩石標本づくり)



③ アイスブレイク



④ 沢遊び (低学年)



⑤ コンパスと地図を使って沢まで行こう



⑥ 沢登り (高学年)



⑥ 缶バッチ作り



⑦ キャンプファイヤー



⑧ 火起こし



⑨ 野外炊事 (カレーライス)



⑩ スモアづくり



⑪ 別れのつどい



7. 成果と課題

(1) 参加者アンケート結果

満足：100.0% やや満足：0.0% やや不満：0.0% 不満：0.0%

(2) 参加者の声

- ・缶バッチ作り、沢遊び、カレーづくり、マイムマイム、学生と話したことが楽しかった。
- ・沢登りで、石の名前（紫水晶、シルト岩、石英）、浸食、運搬、堆積を学んだ。
- ・沢に飛び込むところで、できないと思っていたけどできた。
- ・みんなで協力することや自然の大切さ、火を長く燃やす大変さを学んだ。
- ・たくさん話したり、お風呂を一緒に入ったり、沢遊びやゲームを一緒にしたりして、学生と仲良くなった。
- ・家族や先生がいない中でも協力し合って、布団や部屋の掃除をしていたので、児童の自立や自主性の向上を感じた。（学生）
- ・事前学習で栗原、花山で見られる石から土地のでき方を知った。事前に学んだことで、沢でも関心を持って歩いたことを子どもが話していた。（花山小学校職員）

(3) 成果

- ・栗駒山麓ジオパーク専門員原田拓也さんとの学習を通して、1年生から6年生が岩石の名前を覚えることができ、沢活動では熱心に岩石探しをしていた。参加者アンケートにも、「石英をたくさん見つけることができて良かった」との記述があり、沢活動の教育効果を高めることができたと思う。
- ・教科横断的な学びの視点を用いて体験活動を計画した。例えば、沢活動では5年生理科「流れる水の働き」の学習だけではなく、4年生社会「地図の見方」の学習を活かし、沢の入渓ポイントを地図とコンパスで探す活動を行った。また、5年生算数「速さ」の学習を活かし、距離と速さから時間を予測する活動を行った。教職員へのアンケートにおいて、「教科横断的な学びの視点を用いた体験活動によって教育効果を感じることができたか」の問いに対して、「できた」との回答が100%であった。学校での学びを体験活動で活かすことによって、実感を伴った理解へつなげることができたと思う。
- ・児童と共に事業計画を立てたり、事前学習を行ったりしたことで、児童が意欲的に活動していたように思う。特にキャンプファイヤーでは、6年生が中心となって場を盛り上げる出し物をしたり、野外炊事では、事前に各家庭でカレーの作り方を予習して臨んだり、主体的に活動することができていた。
- ・学生がアイスブレイクやキャンプファイヤーの出し物を提供したことによって、子ども達はとても喜び、学生自身も積極的に子ども達と関わることができていた。参加者アンケートでは、「学生と仲良くなることができたか」の質問に対して、100%の児童が「できた」と回答した。また、学生のアンケートにも「楽しそうに参加してくれて、仲を深めることができた」とあり、双方の交流を深めることができたと思う。

(4) 課題

- ・沢活動の際にカモシカに遭遇し、一時緊張状態となる場面があった。また、気温が高く熱中症が心配となる場面もあった。事前の安全対策を強化していく必要があると感じた。
- ・教科横断的な学びの視点を用いた体験活動の効果を高めるために、事後学習を行うとさらに良いと感じた。学校での学びを体験活動に活かすだけではなく、体験活動で学んだことを学校で価値づけることにより、さらに理解が深まると感じた。

担当：企画指導専門職 渡邊愛